

老人の余暇利用に関する研究

神戸女学院大学教授

池 川 清

老人のレクリエーションについて考える時、私たちは、まず旅行とか趣味の会とかゴルフをとりあげたり、将棋や碁を思いつくが、外国の老人がどんなレクリエーションのしかたをしているかを見ると各国さまざまである。最も素朴なものを紹介すれば次の通り。

エジプト………村のコーヒー店で談笑している。これが、エジプトの老人のレクリエーションの代表的な姿である。

シリア………村の広場の片隅にすわって日光浴をしている。

メキシコ………昼寝をすること。宗教上の祝祭行事に青年たちと一緒に参加することが老人のレクリエーションである。

以上の如き休息・談笑とは別に、ややちがって、日本にみられる如く老人クラブと類似したものであるが、老人たちだけで集団をつくり、娯楽を享受しているのは、イギリス・アメリカ・オーストラリア・ベルギー・ニュージーランドなど特に創立の歴史が古い国々である。

レクリエーションが人間にとって基本的要求（basic human need）であることは、医者も心理学者も老年学者もすべてが認めているところであるが、レクリエーションの持ち方は、それぞれの国の気候と風土、文化によって全く異なっている。その持ち方は、肉体面を主として考えているものがある反面、知的向上を主として重視しているものと2つの傾向が見られる。

また、その国によっても、各個人の考え方からも、レクリエーションのしか

たが違っているのも事実である。

第1 老人のレクリエーションの役割

そこで、私たちは、人生の晩年におけるレクリエーションの役割を研究する必要がある。

(1) それぞれの異なった文化パターンの国において、老人のレクリエーションの必要な理由は何か。

(2) どの程度、そのニードが充足されているか。

(3) いかなる方法によって、そのニードが充たされているか。

全世界の各国の老人のレクリエーションについて調査することは困難であるが、ここには、老人のレクリエーションについての問題提起をするために、次の意図によって、調査し得る限り広く、深く研究してみることとした。

1. 老人に対する施策としてレクリエーションをとりあげている国は、どの国か。

2. 老人クラブ、老人福祉センターが、現に組織され活動している国は、どの国か。

3. それらの国々において実験されて成功している共通の原則が見出せるか。

調査の結果、次の4つの異なった傾向がある。

(1) レクリエーションに対する自由放任主義の考え方をとる国では、老人のレクリエーションもまた、老人個人の問題であるとし、社会が関知する必要があると考えている。

(2) 老人に対する福祉的配慮およびレクリエーション上の処置はすべて、老人の属する家族の責任であると考えている。

(3) 宗教的活動が盛んな国では、老人のレクリエーションは教会活動の範囲内で充足されていると考えている。

(4) 社会 (community) が老人のレクリエーションについても用意すべきで老人は、老人特有のレクリエーション上のニーズがあるから、それを社会によって充足されるのが最も適当であると考えている。

上記の如く、色々の考え方、とりくみの態度があるので、国によっては、老人は日なたぼっこをしてすわっているのが最も良いという説から、活動的な内容をもった行事を展開しなければならないという考え方など千差万別である。

次に見逃がしてならない要素は、それぞれの国によって老人の社会・経済・文化的要素が、老人のレクリエーションの持ち方に大きな影響を及ぼしているという事実である。たとえば、老人の生活保障がないために、食うために働き続けなければならない地域や、レクリエーションのために消費する金がない貧しい国では、金持の国のレクリエーションとは、そのやり方が違う。

また、寿命が短く老人人口が少い国では、老人のためのレクリエーション施設や機会を提供する必要性は相対的に少ないといえる。

大体において、レクリエーション施設は、まず最初は、児童用が設けられ、ついで青少年用、そして最後に老人用が設けられる順序である。

老人達のためのレクリエーション施設、機会が発達している国を見ると、いずれも人口移動が多い国であり、住居を転々と変える国民の多い国々において、老人用のレクリエーションが発達している。また、そこでは、寿命が比較的長命で、経済条件が豊かで、かつ労働者の定年退職制度が確定している国々である。

家族主義による老人に対する家族の責任制度が根深く定着している国々では、

レクリエーションもまた家庭内において追求され、家の外の制度としては、発展し難いようである。

考え方によっては、一国の経済が高度産業化するにつれて家族制度は変化し、家族制度が崩壊すると、地域社会による老人のレクリエーション制度がとり上げられるようになってくるともいえる。

第2 老人クラブと老人福祉センター

産業化によって家族制度が崩壊している欧米諸国においては、早くから老人のニードとして老人クラブが発達している。孤獨的な家から出て、温かいコーヒーと一緒に飲んだり、トランプをしたり、ダンスを楽しむために老人クラブに参加し、手芸を習い、講演を聞き、仲間づくりをしている。

アジアは、産業化が遅れているため、老人は家庭の中において地位があるから、社会的にも経済的にも疎外されているわけではない。

アフリカでは、生活程度が低く、老人の数が比較的少なく、老人も生活のために働いているので余暇が少ない。

南アメリカでは家族制度が強く、家庭が老人を世話しているのと、教会の影響力が大きく、老人たちのために、社会がレクリエーションを提供しようとしても、教会はむしろ反対であるから、老人クラブは発達しにくい。

老人住宅集団が建てられている国、たとえばノルウェー・オランダ・ベルギーでは老人団地内に老人福祉センターが必ず設けられている。

また、老人が余暇を沢山持っている国、定年退職制度が確定している国、生活程度が高い国、たとえばアメリカ・イギリス・カナダでは老人レクリエーション・センターが発達している。

イギリス・アメリカでは、老人レクリエーション・センターに対しては公的補助がなされているが、しかし、老人のレクリエーションを最初にとりあげて着手したのは、いずれの国においても民間の社会事業団体の手によるものであった。

イスラエルは、上記の国々とは別に、外国からきた老人の移民が非常に多い

ので、特に老人センターが発達している国である。これは特例と言ってよい。たとえば、首都テルアビブ (Tel Aviv) には早くから老人クラブがある。民間団体が老人のレクリエーション施設 (センター) を計画しているし、政府も積極的である。

フランス人は伝統的に極めて個人主義的な民族といわれているので、彼等はグループ活動を好まない風習が強い。そのために、アメリカにおける如き老人のクラブ活動の必要性はなく、むしろ、フランスの老人自身が十分に個性的に自己の能力を発揮しているといわれている。

フランス人は、アメリカ人ほどに住居を移動しないし、大体において、生まれ育った土地に住んでいるから、グループリーダーによって計画的に組織された老人クラブの活動の必要性は少ない。しかし、この考え方は老人人口の移動にともない変化するものであるから科学的に証明されているというほどのものではないことも事実である。

フランスは町にコーヒー店が至る所にあり、そこが老人にとって一種のクラブの如きものである。あたかも、アメリカの田舎町の居酒屋が貧しい老人のたまり場であり談笑のセンターであるのと同じである。

フランス人は、このように、意識として老人クラブ、老人のためのレクリエーション・センターを発達させようとしたのではないが、第二次大戦中に、老人のために安価に食事を供給する制度が組織され、そこが、老人の集会の場となり、いわば、食事を第一目的として発足した食堂が二次的に老人クラブとなったのである。この点が、アメリカなどの老人センターとその設立当初の趣旨が違っていることは注意深く理解しなければならない。

この老人食堂は第二次大戦終了と共に一応中止されたが、老人たちには食事の場が必要であるという世論は依然として強く残っていた。これが今日みる如き老人センターとなって各地に運営されているものである。

すなわち、フランスでは老人センターは、アメリカの如く老人にレクリエーションを提供する目的に創設されたものではなく、あくまで、戦争によって食事を炊事することが不自由であった老人のために発足した食事クラブが転化し

て、今日の如き老人センターになったものと解してよい。

老人センターは各国とも、それぞれの歴史的背景が異なって発足していることは、その国の民族性によって大きい違いがあるといえる。

フランスの隣国であり、フランス語を国語としているベルギーは、私たちにはフランスと同じ文化パターンの国であるかの如く印象づけられているが、ベルギーでは、早くから老人クラブ（老人センター）が発足している。そこでは老人たちは、女は編み物、縫い物をし、男はトランプをして余暇を過ごしている。殆んど都市に老人レクリエーション・ホールがあって、娯楽・食事を供給している。

この国の老人センターの特長は、国民性が節約的であるから、老人たちは各自で家を暖房することが不経済であると考えて、長い冬期の燃料節約の意味で、老人センターは暖房設備がよく、老人たちはそこで一日を過ごしている。また、老人ホームには俳優や歌手が巡回して老人に余興を提供している。これもアメリカ・イギリスに見られないことである。

ルクセンブルグでは、老人のレクリエーション・センターは地域社会の中に設けずして、老人ホームの施設内に設け、地域老人がホームの設備を共用している。その設備は、ラジオ、パーティー、庭造り、映画等である。

デンマークでは、もともと老令年金受給者がクラブをつくって、そこで集まりをもち、政治に対しても圧力団体としての活動をしつづけてきたのが老人クラブの始まりである。そのために老人クラブはレクリエーションのためのクラブではなく、また特別のレクリエーション上の設備もしていなかった。民間団体である教区看護クラブ（Parish Nursing Club）が、居宅にいる老人の友愛訪問などをしていた。

かかる状態が続いていたが、最近になって、老人のための住宅団地が建設され、その一部に老人福祉センターが設けられてレクリエーション・リハビリ・ホビールームなどの活動をするようになった。

デンマークにおいて、第二次大戦後の老人のレクリエーション活動が余り活発でなかったのは、デンマークの歴史的沿革を理解する必要がある。すなわち

デンマークは、どの村にもコミュニティセンター（公民館）があって、そこがあらゆる年齢層の人々のレクリエーション、芸術活動の中心であったし、その公民館の運動が村民たちの手によって、村民たちのために運営されているもので、アメリカなどの如く、プロフェッショナルな志向によって動機や方針が立てられていないことは大きい特色である。いわば、真に民主的に公民館は地域のあらゆる年齢、階級の人々のために活動していたと言える。

ただ大都市において、老人たちが老人のためのレクリエーションを求めるようになったことは、デンマークが、それだけ都市化、産業化をもたらしたものと考えてよい。

フィンランドには老人クラブはないが、夏期に老人のための遠足が大規模に実行されている。

オランダには老人クラブがある。しかし、そのクラブはレクリエーションの活動を主としてはいない。

首都アムステルダムには10、ロッテルダムには11、他の小都市には1カ所ぐらいの老人クラブ（センター）がある。

老人連盟（General League for Old People）がレクリエーション行事を主催する。連盟の本来の目的は政治圧力団体としての行動をすることにあるから、レクリエーションは連盟としては第二義的行動である。婦人団体が老人のために奉仕活動しているのはオランダの特色である。

オーストリアでは老人クラブのことを温かい管（Wärmestuben）と呼んでいる。これは、フランスやベルギーにおける如く、本来は老人が肉体的にも心理的にも温かさをとるために集まる場であったが、それが順次発展してゲームをしたり、図書を備えたり、ラジオをきいたりする老人センターとしての形をつくっていった。むしろ、地域社会における老人センターよりも、オーストリアでは老人保養センター（Rest home）が民間団体によって貧しい老人のために設けられている。

スイスには、老人クラブや老人センターはないが、スイス自体が合唱を好む民族であるから、鉄道退職社員の如き退職老人の集まりが、コーラスをもって

いる。いわば、歌うことによって老人たちがレクリエーションを楽しんでいるといえる

リトアニア（Lithuania — バルチック海の小国）には老人クラブは結成されていない。人口が希薄である上に戸外の運動施設はよく整備されているから、特に老人のためのレクリエーションセンターやクラブを考える必要がない。

ユーゴスラビアは、レクリエーションは老人ホームの中に設備されていて、老人クラブは設けられていない。

アイルランドでは首都ダブリンに赤十字社によって老人協会が設定されている。赤十字社に属するボランティアが老人たちを自動車に乗せたり、買物に下町につれて行ったり、パーティーを開いたり、音楽会をして老人を楽しませている。赤十字社は篤志的の芸能人100人程で奉仕団体をこしらえて、老人を楽しませる活動をしているのがアイルランドの赤十字社の特長である。

また、赤十字青年団は、老人ホームにいる老人を精神里親に契約して、時々老人ホームに老人を訪問したり、里親の老人と行動を共にして、ホームの老人の孤独を追放するボランティア活動を奉仕している。

イギリスにおいては、各種の老人クラブが普及している。政府は補助金を交付して、自治体は民間団体を通じて助成している。民間団体の代表的なものは National Corporation for the Care of Old People と National Old People's Welfare Committee である。

イギリスの老人クラブの特色は老人に娯楽を与えるだけではなく、老人が友愛訪問をしたり、乳児の守りをしたり、その他老人の手によるボランティア活動をしていることである。

ロンドンにある老人センターは独立した建物を持ち、午前11時から午後5時まで開館し、建物の内部にはロビー・休養室・レクリエーション室・浴室・図書館・炊事場があり、特に安い値段で昼食（2品付）を供給し、また、作業場で作った手工芸品をクラブの財源になるように一般市民に販売している。イギリスの老人クラブは、大体において諸外国（例アメリカ）の老人センター（Day Care Center）であると考えれば間違いない。

ロンドンにある、Peckham Centre は、老人の利用のみならず、近隣にいる家族たちのレクリエーション・集会場所・健康管理室として1つの建物を総合センターとして活用している。

イギリスの一老人センターの登録老人数は、平均1800人で、その老人たちは年会費4シリングを支払っている。有給職員もいるが、大体100人の婦人のボランティアがセンターの諸活動を援助し、週5日間、11時～8時まで開館している。1つの老人クラブだけが利用するのではなく、多数のクラブが1つの建物（センター）を有効に利用し、点から線へと発展しつつある。

老人クラブ（老人センターを意味する、Community Clubs for Older People とよんでいる）は、イギリス・オランダ・スイスにおいて早くから発達し、スカンジナビア・ドイツ・イタリア・フランスでは遅れていると解してよい。

カナダにおいては、老人クラブは民間団体によって、西海岸の都市および大都市において盛んである。特に、第二次大戦後は、各都市にコミュニティセンター（公民館）が計画的に建てられていることと、それが青年のためのみならず老人のレクリエーションのためにも活用されていることは注目してよい。

オーストラリアでは市役所が老人クラブの発展に大いに援助している。

メルボルン市の南部にある老人クラブでは安価に昼食を提供している。これは独り暮らし老人や炊事に不便している老人に喜ばれている。

オーストラリアにおいても老令年金受給者協会が圧力団体として活発に活動し、また老人のための社交上の行事を実施している。

ニュージーランドでも老人クラブは進展しつつある。しかしニュージーランドの老人たちは老人だけが集団をつくって、若い世代から切り離されてしまうことを嫌うので、老人センターでは、その利用をあらゆる年令層に開放している。しかし、芝生のボーリングやクロケット（croquet）などの遊戯の場所は、老人たちだけの利用を許可し、他の年令層の使用を禁止している。

ある国では老人が日なたぼっこをしているのがレクリエーションであると考え、老人福祉センターを無用視している。しかし、日なたぼっこ哲学を余暇利

用、余暇の過ごし方 (leisure time activity) と考えることは議論の余地がある。

たとえば、オーストラリアは、もともと農業国で都市国民ではなかった。しかも、山の中の村人たちも非常に発達したレクリエーション活動を全村民が参加し得る年中行事、お祭を発達させていた。そして、宗教上の祝日には多数の人々が参加しておもしろい、多種類のレクリエーション行事を楽しんでいる国民である。老人たちは農民として年令に関係なしに百姓の仕事か牧畜の仕事に従事しつづけている。そんなところでは、太陽の照る下ですわっていることは、実に肉体的レクリエーションであるといえる。そんな時に老人たちは、他の年令層の若者たちとも仲間入りして話し込むことができるのである。

老人達が、農耕作業ののち、この太陽の下で休息していることが実は肉体上の厚生であり、精神を休め緊張を調和させるものであると解すれば、老人のレクリエーションをとりたてて組織的計画的に組立てるだけがレクリエーションではないといえよう。ただ、都市老人にとってのみ重要視しなければならない対策であるかもしれない。

第3 アメリカの老人クラブと老人福祉センター

アメリカで、老人クラブ・老人センターが全国的に普及しはじめたのは、1946年頃からで、それまではごく稀にしかなかった。たとえば、フィラデルフィア市では1946年に10クラブであったが、1951年には75クラブにまで発達している。ニューヨークだけでも、1948年には50クラブである。その後1951年にはニューヨークで老人クラブは100、老人センターは12カ所ある。

老人クラブではなくて、会社を定年退職した退職者で、企業年金の受給者ばかりで結成されているクラブは、戦前からあったらしいが、今日われわれがいう如き老人クラブは戦後のものとみてよい。

アメリカの老人クラブは沿革からは民間団体によって創立されたものであったが、その必要性が公認されるにしたがって地方自治体が老人のレクリエーションのための便宜を供与しはじめ、のちにはクラブの設立についても補助金を

支出するようになったのがアメリカの各都市の実情である。

老人センターとして最も初めに公立で設置されたものが、ニューヨークのハドソン老人センター（Hodson Center）である。これがモデルになって、他都市の老人センターのパターンがつくられていった。

老人センター（day-care center）には各種各様のものがある、Hodson Center の如く、市立のものや、週一回夕刻だけ老人の集会の場を教会、公民館、体育館の部屋を借りて開催しているものもある。それらの老人クラブは民間社会福祉団体が支援してできている老人クラブである。

公立の老人のための施策は遊戯体育（bowling, horse-shoe）などの遊びを主としているものが多いようである。

レクリエーションを主とする老人センターや老人クラブは、市の公園課が援助しているものに多いが、それとは別に連邦政府がとりあげているものに、市の教育委員会が学校を利用して老人学級を開催し、老人のための各種の学習コースを設けているところもある。

また、老人問題について教育、訓練を修得するリーダーを養成し、老人クラブの指導にあたらせようとしている教育委員会もある。

老人のホビーショーは、大都市で開催されるが、これは老人の余技を展示して、余暇利用を開発しようとする新しい試みである。

中南米諸国では家族の責任が強く、老人クラブは発達していない。しかし、チリ（Chile）では民間団体が老人クラブを結成しつつある。

ブラジルでは老令年金受給者の団体は、大都市（リオデジャネイロ）には結成されているが、これは年金増額の陳情活動をする圧力団体で、いわゆる老人クラブとは趣旨が異なっている。退職労働者は資本家側でつくっている社会福祉、レクリエーション基金から補助をもらって老人のためのサービスをしている。

メキシコでは、家族の連帯が強く、老人は家庭内において同居を続けているし、宗教上の祭事に大きな興味をもっている。大体において老人には、「日なたぼっこ」の哲学が普及している。

アメリカにおいて、老人クラブや老人センターが、老人対策として最初にとり上げられたのは何故か。

まず、老人のもっている巾広いニードを満たすために、地域社会の老人に対する関心を積極的にくみ上げる最もうってつけの方法としてとり上げられたと思われる。すなわち、

(1) 戦術的に老人クラブをとりあげて、社会の老人に対するイメージに動きを与えたこと。

(2) 最も金のかからない、かつ、とっつき易くて失敗の少ない老人クラブという事業をすることによって、地域社会が、急を要する老人対策の一翼として何かしらの建設的な事業をしているのであるという感じをもたせたこと。

(3) その上で、老人に対する各種の保護、援助、福祉サービスの広範な事業を展開する礎石として老人クラブを利用したこと。

(4) 老人クラブは、せいぜい週1回とか2回しか集会をしないから、定年退職した老人の余暇のすごし方、家庭にいる女老人の家事からの解放後の時間のすごし方に力を貸すものであるが、老人福祉センターは将来の老人福祉の拠点として考案されたものである。

第4 東洋の老人クラブと老人福祉センター

東洋においては、特に日本では戦前は、老人は若い世代と共に同居して、老後は老人は思い思いのホビーや道楽を楽しんでいたのが普通であった。

その他の国々でも、東洋においては老人に対する家族の責任制は確立していたから、家庭では老人は、長老として尊敬されていたし、老人達も老人クラブを結成しているところは殆んどなかった。

セイロンでは、老人たちは家事、家の仕事に従事している。また、若い時代に何かのクラブに所属していた人は、老人になってもそのクラブに所属し続けている。

台湾、ビルマなどでも、若い世代が、家庭で老人の面倒をみることは当然とされているし、老人クラブをつくる必要はない。

韓国では「敬老堂 (Respect the Elders Association)」がある。

フィリピンには老人クラブはない。老人たちは完全に休息とリラックスの状態で老後を過ごしている。

インドには老人クラブはない。宗教上の祭事をする 것과孫の守りをするものが、老人の最大の仕事である。

シリアでは、老人は村の広場のまわりにすわって一日中を過ごしている。

トルコでは、老人は静かな老後を過ごし、家族集団の中で安息することを欲しているから、老人クラブはない。

モロッコ・エジプトには老人クラブはないがしかし、男の老人たちだけは、おきまりのコーヒー店か、お茶の店へ集まって談笑している。しかし、女老人は、家政に従事していることに大きな興味を示している。

第5 老人がレクリエーションを必要とする論理的根拠

(1) レクリエーションは、単に娯楽（おもしろいということ “Fun” の意）的価値以上の意味がなければならない。すなわち、レクリエーションすることによって、老人のパーソナリティの若さが保存され、活気づけられなければならない。

(2) レクリエーションによって老人の肉体が活動的になるような生理的ニーズが満たされなければならない。

(3) レクリエーションによって、老人の心理的発達に対する欲求が充たされ、知的視野が大きくなり、あるいはまた老人の全人格が伸張するものでなければならない。

(4) レクリエーションによって、老人が必要視されているという感じ、有用な存在であるという自信、また社会関係において存在意義があると認められているという心理的満足感を充たすものでなければならない。

(5) 個人で楽しむにせよ、また集団で行動するにせよ、レクリエーションによって老人が、個人として持っているニーズと具体的に連鎖したものでなければならない。

(6) レクリエーションは他人から、おしつけられて実行したり、参加するものではなく、老人が完全に選択権を持って、自分の意志で選んだ上で参加するものでなければならない。

アメリカのグループワークの学者は、レクリエーションを次の諸点を満足させるものであると解している。

1. 自己表現 (self-expression)

2. 集団への所属

3. 歓迎されているという感じ

そして、老人はレクリエーションによって

1. 承認されているという気持 (recognition)

2. 競争に参加していること (competition)

3. 自己防衛 (self-protection)

4. 珍しい体験 (adventure)

をもつことが可能である。

かくの如く、レクリエーションは非常に巾広い観点から考えられるものであるから、老人にとっては生物学的にも心理学的にも根拠のある理念に基いて必要不可欠の向老過程におけるニードであり、これは、いかなる民族にとっても同じくいえることであると思う。

第6 各民族の文化パターンが違ふことと、老人のレクリエーションの持ち方が生理学上または、心理学上いかなる違いがあるか。

たとえば、「ひなたぼっこ」のタイプのレクリエーションは、老人の行動性を開発しないし、社会生活への参加、生存の社会化に役立たない。

家の中の家事に従事していることも、老人のパーソナリティの開発向上には何ら役立たない。

アメリカでは、老人が適当なレクリエーションを試みることによって老化や精神病の発生率を低減させることができるといわれている。また、精神状態に悪影響のある病気から老人を予防するし、老令にともなう退化的変化を軽減し、

働く能力を回復することを助け、自信をもたせ、引込み思案な性格を元気づけ、拒絶感をなくす、などの効果があるといわれている。

しかし、実は、これらのことは、すべて科学的な実験が全部終わっているわけではない。

ここに、ひとつの疑問がある。女老人が孫と遊んでいることは、全く老人の有用感を満たしていないか？また、老人が孫と遊んでいるのは、老人がホビールームへきて、陶器の花瓶を手づくりして楽しんでいるのと同じ経験をしているのではないか？これらのことも、まだ十分に研究しつくされているわけではない。

たとえば老女がいよいよ孫の守りをしているケースと、喜んで生き甲斐として家庭内における有用な責務として子守りをしているというケースでは、同じ子守りであっても老人のもつ心理的、生理的満足感は全く違っている筈であるが、こんなことはどう解釈すればよいのか。

レクリエーションとは、単にアメリカ的なレクリエーションだけを意味しているのは、アジア人として十分に賛成し得ない。

老人のレクリエーションと関連して論じつくされていない問題点としては、

- (1) 老人の希望、要求の種類が実に多いこと。
- (2) 老人の過去の生活歴の背景が、ある老人は知的職業者であり、他の老人はそうでない人々もいるということ。
- (3) ある老人は、老後のレクリエーションとして知的追求を捨てていないし、ある人はただ遊ぶだけで十分だと思っている人もいること。

これらの多岐多様なニーズに対して、どう対処すべきであるかということが今後に残された大きな問題である。

今までの老人クラブ・老人センター以外に考えられ、かつ実現しつつある社会事業としては、

- (イ) 老人カウンセリング
- (ロ) 老人の住い
- (ハ) 友愛訪問

(二) 就労あっせん

がある。

老人センターは有閑老人の遊び場ではなく、働く老人の free time（働いていない時間）をどうすごさせるか、また老人の精神衛生面の計画行事をどう展開するか（センター）であるという考え方もある。

老人が一日中9時から5時まで働きづめに働いている時は、退化が早く現われるという学者もいる。一定の年齢以後の働く時間について何時間がよいかを研究すべきである。

老人は夕刻の時間にレクリエーションに参加するのがよい。映画見物とか、ラジオを聞くとか、新聞を読むとか、親せきを訪問するとかを、一週に一回、（毎土曜日夕方など）実行すること、また、センターで知りあった友人を訪問（週一回ぐらい）することをすすめている学者もいる。

老人クラブはレクリエーション的要素を配慮して活動すべきである。とりわけ、貧しい老人が多く、商業的レクリエーションに支払う金をもっていない老人のことを考えると特に、ある地域ではかかる配慮が必要であり肝要である。

老人クラブは老人センターと同じ効果や成果があるものとは思われない。

老人センターは社会施設として設置されたものであるが、老人ホームの代替物ではないし、むしろ地域社会としては、老人ホームを建て、老人を収容保護するには莫大な金が必要であるが、入所する老人の数は極めて少ないが、老人センターは、安い経費でより多くの老人に利用してもらって、その利用老人が老人ホームへ収容保護される必要な期間を少しでも短縮する効果はある。これほど安くて、多くの老人が利用できる施設は他にはない。

老人センターが活動を十分に居宅老人の生活を護ることができれば老人ホームの数は少なくてすむ。この時こそ、老人ホームは真に介護を必要とするか、環境上保護を要する老人だけを収容する施設になるであろう。独りで歩ける老人などは老人ホームにはいなくなるし、かかる健康な老人を収容する場所ではなくなるであろう。

第7 調査の必要性

(1) 老人にレクリエーションが必要な理論的科学的調査と研究がなされなければならない。

(2) その土地の習慣、家族制度によっても老人のレクリエーションのしかた、態度は異なっていてよいのではないか。

(3) 現になされている老人のレクリエーションの実態についての調査が必要である。

(4) 老人のレクリエーションを主な活動行事としている老人クラブがあるが、その行事が、老人の寿命を延ばすことに役立っているのかどうか。

老人クラブに所属し、クラブ活動を楽しんでいる人の健康上、心理上の効果はどうか。

(5) 若い頃にレクリエーションをしていた老人が、老後においてどんな影響を生活のしかたにおいて継続しているか。

(6) 老人には、どんなタイプのレクリエーションが望ましいか。

(7) 農村における老人と都市における老人と、その地理的環境のちがいがからレクリエーションのニーズが違うのではないか。

(8) 宗教とレクリエーションとの関係、影響、密着度の研究はなされなければならない。

(9) 老人が集団で行うレクリエーションと個人で行うレクリエーションの効果、価値についての比較研究。

(10) 老人ホーム、レストホーム（中間保養施設）、老人病院などにおける特別なレクリエーションの必要性和方法。

(11) 物療上、職業療法上のリハビリにおけるレクリエーションとの関係。

(12) 文化パターンによって老人が社会的に隠退するしかたが違っていることの研究。

(13) 他の年齢層と協力して行えるレクリエーションの価値について。

(14) 老人が過去においてもっていたが、すでに長い間していないために忘れてしまっているレクリエーションを再びとりもどさせる方法の研究。

(15) 身障、または寝たきり老人のための特別なレクリエーションの道具の開発について。

(16) 収入をとまなうようなレクリエーションの種類についての研究。

(17) 老人のレクリエーションの場をどこに求めるか。

第8 結論

(1) 老人のレクリエーションが必要であるということは、まだ世界的承認を勝ち取っていない。

(2) ある国では、老人はパンを必要としている。そのためレクリエーションを求めている国もある。

(3) 日なたぼっこが老人のレクリエーションであるという考え方は、文化パターンだけではなく、食を求めるためだけでもなく、気候によってそうになっている国もある。また、老人のためのレクリエーション施設がないために、日なたぼっこをしているところもあるのではないか。

人間は機械と同様に、心も身も時々再充電 (recharge) するレクリエーションがあってこそ世界は進歩し、繁栄してゆくのではないだろうか。

実にレクリエーションこそは心身を爽快にする刺激剤であり、老人がすでに無用の存在であると自分で思い込んでいる最低の市民としての重荷から、社会における有用な人間としての地位を回復しうる隠れた可能性をめざめさせるものである。さもないければ、老人たちは食糧をくいづぶす非生産的人間の代表者になってしまうであろう。

人間は、どの年令層においても、人から指導をうけることなしに賢明にレクリエーションを学べる人は少ない。指導者なしで、老人がひとりでレクリエーションのしかたを学びとるものであると考えたのは、過去の誤りで、それを改めるべきである。

レクリエーションは老年学者 (gerontologist) にとっては道具 (tool) であるが、老人医学者や社会事業家にとっては盟友、味方 (ally) であり、老人

にとっては希望 (hope) である。

レクリエーションは最も安い、最も生産的な投資である。産業化社会の進むにつれて老人の社会における座は全く不安定なものとなっている現在において、老人の尊厳 (dignity) と有用性を回復するには、レクリエーション以外にはない。

老人について、家庭で世話するのが最上であると考えている東洋人から見れば、アメリカやイギリスの如く、老人を老人ホームへ入れることを善であり社会的処置であると考えている国民に対しては、残忍であると思うであろう。

また、英米人の如き社会保障によって老人を保護すればよいのだという考え方を承認しない国々の人にとっては、レクリエーションを社会が受けとめるべきではなく、家庭が第一義的にうけとめるべきであると考えているだろう。

いずれにせよ、老人問題に対する基本的姿勢の違いによって結論は違ってくるが、レクリエーションが人間にとって必要不可欠のものであるとすれば、それは、老人クラブであれ、老人センターであれ、日なたぼっこであれ、老人の **free time** を最も有効に過ごさせる技術を展開するのが社会事業技術であるといえよう。

個人的レクリエーションを主とするか、集団的レクリエーションを主とするか、混ぜるかは、その国、その人の文化・経済・家族関係・交友関係によって違ったものとなるであろうということだけはたしかである。